

教育現場で思うこと

成末 肇士



中学生による殺人、未成年者の非行、いじめ等、続々と世間をさわがせる事件があり、教育に対する非難や反省が取りざたされています。

三十数年間、大学、高校、それに加えて四年前からは小学校にも関わりを初めた私にとつて無関心ではおれません。

「心の教育」の必要性を考え、私の関与する小学校では「優しさは人間の基本である」を教育理念の一つにして動植物を實際に育てさせる等の体験学習を実践させています。

何気なく食べているお餅はどやうやう作られたかを実感させるため、学校の近くに田んぼを借りて、もち苗作り、田植え、稲刈り、脱穀、餅つきと全行程を一年生から体験させています。稲を自分の手で育てて始めて、稲を含む植物でも動物と同じように生きている事を実感させるのです。

ですから、生きている米を人間は餅にして食べるのですから「いただきます」といって食べ、食べ終わったら「ごちそうさまでした」と感謝の気持ちを表わすのです。

集団疎開で深へ

人見 数良

私達の大阪市海老江(えびえ)東国民学校(こども学校)の疎開は、四年生が原田村、五年が木之庄村、六年一組が美ノ郷村三

成、私達六年二組は深田村深がそれぞれ集団疎開児童受け入先となった。

三成に疎開した遠田人明さんの記録では、三成は追加も含めて四十七名となっている。

深へお世話になった私達は、はじめに三十四名、十二月七日に追加三名、計三十七名となっている。

どもたちに「心の教育」をするのは大変なことで、一番大切なことは「家庭教育」だということを感じておられます。

子どもの成長過程で、環境として最初に現れるのは家庭であり、まず接触をもつのは親です。

子どもは学校にあがる前に、家庭で一個の「人」として成長を始める、幼いながらも自分のまわりの環境に影響されて育っていきます。



為清 誼

シベリヤ拘留記

はじめに

シベリヤの収容所では、「寒さ」「飢え」「重労働」の三重苦の極限の生活を体験した。戦友がバタバタと倒れて近くで私を支えたものは、生きて故郷へ帰りたいという気持ちだった。

一、終戦までのこと

太平洋戦争もだんだん雲行きがおかしくなっていた昭和十九年九月一日、私は広島市比治山町に所在する「船舶通信隊第四中隊」に入隊。現役の入隊で二十歳だった。

そこで、しばらく、受信・送信と暗号の教育を受けた。昭和二十年二月初旬、船舶通信第五大隊に転属になる。任務は、南朝鮮(当時皇親志)の港と日本海の港との通信連絡であり、二月末日に下関へ行く。

昭和二十年三月七日、船舶通信第六大隊に転属され下関より広島島に帰る。この隊は、北朝鮮児童の寮は別棟になっている。深校は初等科が一・二年、三・四年、五・六年の三クラス、高等科が一・二年の一クラス、合計四クラスしかなく、私達は校舎の中の二室を借りて一室を教室、一室を寮として使わせて頂いた。

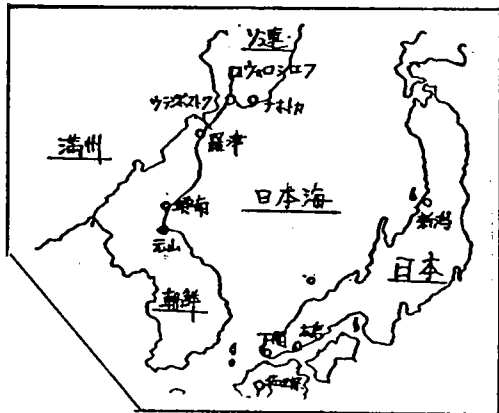


江戸町人社会に、子どもの教育法として次のような格言があります。

「三つ、心。六つ、躰(てい)。九つ、言葉。十二、文(ぶん)。十五、理(ことわり)で未(ま)きまる。」

人間の心は、脳と身体を結ぶ糸のようなものだ。千本の糸を生まれて三年で張り廻らせよ。これが「三つ、心」です。これは両親の役目です。「三つ子の魂百まで」です。「六つ、躰」は、張り廻らされた糸をスムーズに操ることができるようになるトレーニングです。

このように段階的にそだて、いくことで将来は決定される。立派な商家の旦那衆や、おかみさんになれるというわけですね。これは江戸町人が、自然と身につけた知恵であり、儒教文化とは全く関係ありません。



の港と日本海の港との通信連絡が任務で本部は新瀉にある。昭和二十年三月二十八日広島を出発し新瀉へ。

五月初旬、私の属した二中隊は北朝鮮に行く事になり、新瀉港より百名位が乗船、羅津に向う。中隊本部は羅津で、元山通信所へ行く。そこから、日本海の港と通信連絡をする。

昭和二十年八月一日、小隊長と連絡の為、羅津本部へ行き、そこで北朝鮮出身の平山曹長に会う。曹長から「終戦が近く捕虜になるとシベリヤに拘留される。早く南朝鮮に行け。」と言われた。

昭和二十年八月十五日 終戦。任務が通信だから、情報は一早く知る事ができた。

教育の基本は自発力を身につけさせることであり、親が中心的な役割を担っていました。当時の学校は寺子屋でした。地方の寺子屋は読み書き算盤が中心でしたが、江戸の寺子屋は「見る・聞く・話す」が中心でした。現代でも通用する、素晴らしい教育方法だと皆さんも思いませんか。

次号に続く

町内各種団体行事予定

- ★力石ミソヨ様 九十六歳 十一日
- 小学校
- 始業式 五日
- 水泳記録会 五日
- 集金日 八日
- 貯金日 一日
- 祖父母参観日 二日
- 振替休業土曜日 二日
- 秋運動会 二日
- 代休 二日
- 女性会
- 役員会 五日
- 中組親睦会 五日
- 消防団
- 団員教育訓練 二日
- 子ども会
- 市子連ソフト大会 四日
- 町内会連合会
- 町民運動会 二日
- 上組町内会
- 中国遊歩道整備作業 七日

※掲の各団体が皆まじり協力して盛大に終戦記念行事を行いました。厚くお礼申し上げます。

展望席

単純な人間にとつて解らぬことの多い社会である。例を上げれば、銀行・証券業の犯罪行為に對する当局の対応。金融システム安定のためには税の投入もやむを得ない。税の投入もやむを得ない。しかし、責任の所在は明確に。米國では、パブル破綻で千九百人の破産者が刑務所送りとなった。日本の「住専」で誰の責任が問はれたのだろうか。地方自治体の何百億円の裏金問題。何の目的で捻出されたのだろうか。飲み食い、それとも？ 役人天国である。企業の赤字決算は罪悪である。では、利益を出すためには「何をしてもよい」とは言えない。商法を始めとする商ルールを守る。もっと大切なことは、企業倫理・社会倫理に従うこと。法律で禁止された事柄は犯してならぬ最低の道徳。最低の道徳さえ守れぬ指導者が闊歩できる。単純な人間に解りやすいことは、そのことが「誰のため」「何のため」に役立つかということである。指導者にとつて、「自分のため」は、二の次 三の次であつてよい。



校舎と共に

募金と前掛けと

石井 哲代

この夏、三原市深町の名が全国紙で紹介されました。如水館高校野球部が広島県の頂点に立ち、甲子園出場を果たしたからです。

「おめでとうございます。」又町民挙げての応援の様子も伺い、さすが深町の皆さん!!と、拍手を送るものです。時は移り変わっても人情は変わらぬものですね。「いざ」となったら町民こそぞっての気質も。

「校舎と共に」というテーマで、今は昔の話を変えたい間書かせて頂きましたが、この度のように町民こそぞって応援して頂いたあの頃の出来事の一つを書いて新しい息吹きへバトンタッチさせて頂くことに致しました。

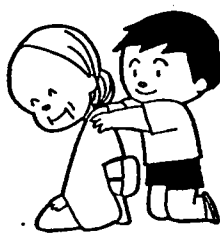
それは二十五年前の冬、五・六年生の白滝園訪問にまつわることです。白滝園はご承知のように小泉町にある眼の不自由な方の老人ホームです。園のおじいさん、おばあさんは一日の大半をお部屋で座っての生活なのです。あの頃は物のない時代でした。座ったひざが暖かいだろうからと、ネルの巾着の前掛けを贈ることにしました。

然し、子ども達の小遣銭ではどうにもならず、児童会として町内で募金しようと話し合い、聞かせて下さい、歩んだ道

河野 強

「ふかまのまど」誌もはや四十号をこえましたね。毎号たのしみに読ませて頂き感動しております。編集作業は大変な仕事で、編集者の苦勞の程がわかります。原稿を集めるのも苦勞のひとつですね。寄稿される方が決まっている感じがして少し残念です。折角の企画ですからもっと多くの方々の投稿がほしいものだと感じました。戦後五十年という言葉があり、戦後五十年という言葉を過ごされた、お爺さんやお婆さんの、当時の苦勞話をお聞かせ頂きたいものだと思います。特に戦時中を乗り越えられた方々は、大変な苦勞の連続だったと想像します。時代も変わり、現在ではテレビやファミコンゲーム機の普及で孫たちとの交流も少なく、貴重な昔話や、体験談もされることもなく、胸のうちの晴れませう。いろいろな苦難、苦勞を乗り越えられた方々がおられるお陰で現在の深町があるんです。

先日、毎日新聞に長野県飯田市特別養護老人ホームの、米寿



プリントも自分達でして各家庭へ配り、お願いして歩きました。低学年も勿論大きい人について戸別歩いたのです。

当時、三原駅前「ダイヒロ」という雑貨店がありましたね。放課後、冬の暮れは早く電灯のともる頃、学校の近くの二人の子とネルを買いに行きました。いろいろ訳を話し「募金額はこれだけ、前掛けは五十四枚分」と話しますとおばあさんが一反、一反計って下さいました。おじいさんは算盤でパチパチしておられたが、お金が少々不足らしい。ところがおじいさんもおばあさんも「深町の人の子どもの言うことでも本気で聞いてあげて募金しちゃったんじゃないか、私達も募金させてもらいますよ、余ったお菓子でも買おうて行っかけて」といって、うんと、うんとまけて下さいました。暗くなった峠道のバスの中でも「よかったね。」と喜び合いました。

翌日の放課後からは五・六年生の前掛け作りが始まりました。廃棄処分ミシンを上の倉庫から引っ張りだして器用な子が修



や卒寿を迎えられたお年よりが最後の言葉も交わさずに亡くなるさを感じ、生きている証を残したいと、施設長さんの発案で、戦中戦後の体験話をして、胸のうちを晴らして貰おうと文章の書けない人には語ってもらい、テープに録音して原稿を書き、激動の時代を生きた体験文集を出版されました。

読ませて頂きました。中には涙なしでは読めない記事もあり感動しました。

本人たちは、自分らの語らいが本になり、感慨無量で、自分の小遣いで買いたい親類に分けたり、ベットの枕もとに置き時折手にして開いて見ている。と報じております。

誰でも文章を書けといわれると色々億劫になり、嫌なものですがへたでもいいます、上手に書こう、名文に書こうと思わずに、ありのままを相対で話したり、語るように書いてほしいのです。歩んで来た道、体験記、苦難の胸のうちの晴らしはしめ聞かせるつもりで書いて頂きたいのです。自分たちの苦勞や努力が、現在の深町があるんだと胸を張って教えて下さい。

「温故知新」という言葉があります。「古きを尋ねて、新しきを知る」ということです

理してくれて三台のミシンがフル稼働。当時の文集には、「毎日放課後好きな卓球もしないで長方形に切った布をミシンで縫い、家から紐にする布を持って来てアイロンを掛けミシンで縫い付けた」と書いています。五十四枚出来上がったのは卒業一か月前だったようです。

お菓子も買って訪問しました。学校の様子や募金のこと、製作の様子もお知らせしようです。この前掛けは白滝園の皆さんがずーと愛用して下さいました。或るおじいさんは、ポロポロになっても「深の前掛けだ」と言ってお懐から離れなかつたのでお棺の中へ入れて上げて下さったそうです。昭和六十一年の暮れのことです。

「深の方言なまり」を終えて

石井良雄

出来るだけ多くの魚を取るために底曳き網を使うように、落ちないような方言・なまりを集めたつもりである。しかし、全部拾い上げることは難しく漏れたものもあると思う。思うに、上、中、下組それぞれ二名位で相談しながら集めたらよかったと思う。

次に、標準語を上段に書いて、下段に方言を書けばよかった。例えば、「肩車」のことを深では何というのであろうかと思っただ時、それを探るのが容易だったであろう。

◆この程、如水館高校の野球部が、広島県代表校として甲子園出場したことで、一躍、深町の名が全国に知られ、本当に喜ばしい限りです。これとても、お年よりの方々が村を愛し、汗と努力で開拓しまり立派な深町を築きあげてこられたことへの贈物と言えきでしょう。

◆折角深町のみならず、交流の絆の「ふかまのまど」誌を活用されて、苦勞話を後世に語り継いで下さい。これがまた、これからの深町の発展につながると思うからです。

▲▲▲ 元三原市立深町の登壇者以上三評し方です。尚書は深町出身です。一幸町産

●春夏・秋冬● 梶谷マサヨ
・教子の丹精のもも仏前にうす紅の 色の美し
・初盆に三尊佛を迎え光あり 生きる支えと喜びており
・供養のため願いをこめて 出せし歌 誌上にのりしを仏前に俵ぐ

●お知らせ● 本年も十月十八日(土) 干川神社恒例の秋祭り行なう予定です。祭礼後、演芸大会を行います。出場希望の方は、九月十五日までに、各組役員へ申し出て下さい。 干川神社役員一同

●老人保険制度改正に伴う講習会のご案内 平成九年九月一日より、医療保険制度が大幅に改正されます。尚書会では改正される主な点についての説明会を次の通り行ないます。会員以外の方も受講下さい。

●尚書会秋の親睦旅行を九月四日予定しております。大池バス停九時三十分出発。尚書会 森本 忠

●敬老会の延期について 九月十五日に行なっていた敬老会を、皆さんのご要望で、今年十月五日(日)を予定しています。改めてご案内は致しますが、変更をご了承くださいませ。 女性会 会長 金重八重子

